

平成18年(昭和31年)4月11日(火)

東海の古代

第71号 編集・発行 古田史学の会・東海

代表 林 俊彦 〒461-0025 名古屋市東区徳川1-729

メール frttokai@zm.commuja.jp

電話/FAX(カラー可) 052(936)5012

郵便振替 00870-5-30752

古田史学論集「古代に真実を求めて」第九集が出ました。秋田書店刊、二千六百元+税です。ぜひご利用ください。

前号で八世紀最初の遣唐使をめぐるエピソードを紹介しましたが、実に奇妙な記事だと思いませんか。新生日本の一行は唐の朝廷に無事たどり着き則天武后との面会も果しているのに、それにはまったく触れず、地方役人とのやり取りだけが、続日本紀に残されているのです。

長安三年(703)、其の大臣、朝臣真人、来りて方物を貢す。朝臣真人は、猶中国の戸部尚書のごとし。進徳冠を冠り、其の頂に花を為し、分れて四散す。身は紫袍を服し、帛を以て腰帯と為す。真人、経史を読むを好み、属文を解し、容止温雅。則天、之を麟徳殿に宴し、司膳卿を授け、放ちて本国に還らしむ。(旧唐書日本国伝)

実は八世紀に入っても、大陸側と日本側の史書にはこの他にも奇妙な食い違いが続いています。

ここでちょっとおさらいをしておきますが、続日本紀は非常に複雑な編纂経過をたどっています。あえて整理すれば、

①淳仁朝に藤原仲麻呂らによって、文武天皇元年より天平宝字二年までが、三十巻にまとめられた
②光仁朝にこの三十巻を、石川名足・淡海三船・当麻永嗣らが修正・増補した
③桓武朝にさらに菅野直道・秋篠安人・中科巨都雄らが再訂して二十巻にまとめ、別に天平宝字二年以降、延暦十年までを二十巻とし、計四十巻に構成した。となりま

す。

要は現在の続日本紀は八世紀末の桓武の志向によって最終的にまとめられているわけで、正直な史書ではなく、多様な改竄が行われているものと見なければいけません。

其の人、入朝する者、自ら衿大にして実を以て対せざる、多し。故に、中国焉れを疑う(旧唐書日本国伝)

使者、情を以てせず。故に焉れを疑う(新唐書日本伝)

古田先生が、いわゆるONライン(西暦701年)を越えてなお長期に唐軍の倭国駐留が続いていたとする新説は、上記の史料を見ると違和感を覚えたのですが、戦後日本のケースで考えず、例えば米軍占領下のイラクを連想するべきかもしれません。古代日本人は現代よりもはるかにしたたかな姿勢を堅持していたということになります。

5月例会に参加を

日程：5月14日(日)午後1時～4時半

場所：名古屋市市政資料館第4集会室(2階)

名古屋市東区白壁1の3(名古屋拘置所南)

地下鉄名城線「市役所」下車、東へ徒歩8分

名鉄瀬戸線「東大手」下車、南へ徒歩5分

市バス「市政資料館南」下車、北へ徒歩5分

〃 「清水口」下車、南西へ徒歩8分

〃 「市役所」下車、東へ徒歩8分

一応、駐車場有(無料)12台収容

南隣にウィルあいち(愛知県女性総合センター)ノ地下駐車場30分170円

参加費：500円(維持会員は無料)

今後の予定

6月例会：6月11日(日)

7月例会：7月2日(日)

例会はなるべく毎月第2日曜日に固定したいので会場をしばしば変更することになりました。よく確認してからお出かけください。

6月は市公会堂(第3集会室)です。7月も市公会堂ですが、第1集会室です。また古田史学の会

事務局長・古賀達也氏の講演会を兼ねます。

古田先生とその学問に興味のある方ならどなたの参加も歓迎します。また参加に際し事前連絡は不要です。遅刻早退もかまいません。

続々・呪符の証言

前々回の「呪符の証言」で一部私の思い違いがありました。「出雲国風土記」にヤマタノオロチの記載は一切ありません、としましたが以下の記事がありました。

母理の郷…天の下造らしし大神、大穴持命、越の八口を平け賜ひて…(出雲国風土記意宇郡条)

これをもって記紀に言うスサノオのヤマタノオロチ退治伝説と同一視する優秀な学者さんも見えることを知りました。

深くお詫びするとともに訂正いたします。普通に読めば「出雲国風土記」にヤマタノオロチの記載は一切ありません。

さてヤマタノオロチ(筑後川の氾濫)により唐軍が壊滅したとする私の説に対し、何の証拠がある？とする方も見えるようです。

文献史料としては、今のところ、あの平城京木簡以外は皆無です。しかし考古学的には、巨大な証拠群があります。他にもない神籠石(朝鮮式山城)・水城群です。筑後川を取り囲むように、九州北部一円に雄大に展開する、膨大な労力と物資を投入したであろう、あれら施設がその機能をなんら発揮せず朽ち果てたと考えるほうがおかしいでしょう。

筑紫平野に深く侵攻した敵軍を眼下に睨み、住民全員を域内に避難させ、乾坤一擲の水攻作戦を決行するのが施工の目的だったに違いありません。そしてそれは実行されたのです。

事しあらば 小泊瀬山の 石城にも こもらば 共に な思ひ吾背 (万葉集 3806 番)

この歌は後書きに引きずられ、奇妙な解釈をする本ばかりですが、歌そのものは、「石城」とは神籠石のこと、「事しあらば」とは唐軍の侵攻を指すと思われまふ。九州にも小泊瀬山はあるようです。

吉野ヶ里公園近くの堤土墨跡、古田先生は唐軍が破壊したとされていますが、長期駐留するつもりなら、軍用道路とも灌漑施設ともされる有用な施設を壊すはずがありません。九州王朝側が作戦終了後の水抜きのため、こわしたものと考えてるのが合理的でしょう。

丙戌(16日)に、筑紫より唐人三十口を貢れり。則ち遠江國に遣して安置らしむ。庚寅(20日)に、詔して曰はく、「諸王より以下、初位より以上、人毎に兵を備へよ」とのたまふ。(天武四年十月)

前半は前号で紹介しました。後半はあまりにさりげなく記述されており、見過ごしていましたが、大変な内容です。「諸王より以下、初位より以上」とは結局全ての冠位を持つ人、すなわち天武に忠誠を誓う者(武官も文官も)全員に武装を求めています。

筑紫からの贈り物(唐人三十口)はそこまで天武の心胆を寒からしめました。唐駐留軍の壊滅と九州王朝勢力の復活が宣告されたのですから。

…又詔して曰はく、「凡そ政要は軍事なり。是を以て、文武官の諸人も、務めて兵を用ゐ、馬に乗ることを習へ。…」(天武十三年閏四月条)

「凡そ政要は軍事なり」とは言いながら日本書紀には、壬申の乱以降、天武の存命中、まったく戦闘の記録はありません。しかし天武は確かに誰かとの軍事的緊張に苦しみ続けたようでありまふ。

唐軍に倭人の魂を売り、壬申の乱で天下盗りを狙った天武。しかし、その唐軍はヤマタノオロチに食べられてしまった。一方、ヤマタノオロチといえば尾から出てきたのが草薙剣。それらを前提にして初めて理解できるのが日本書紀の次の記事でしょう。

天皇の病を卜ふに、草薙剣に崇れり。即日、尾張國の熱田社に送り置く(朱鳥元年六月条)